

---

# ぽっちゃり冰竜

草紅葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぱつちゃり氷竜

### 【著者名】

NZード

### 【作者名】

草紅葉

### 【あらすじ】

登場する生物

?ぱつちゃり系推進女子 一名

?見た目ただの肥満体中年（氷竜） 一頭

主に上記の一姫と一頭が出合い恋を通り越してまず夫婦になり、ほのぼののんびり恋に落ちていくお話です。

このお話は超不定期更新の上、短編連作系になる予定でござります。

「……誰？」

田を覚ますとそこには自衛隊ではなく、日本百景にでも選ばれていそうな美しい雪山で……田の前にはぽつちやり系のオッサンがいた。

「……ええっと、僕は氷竜だけど。君は？」

ぱつちやり、触ればぽちやぽちやして波打ちそうな豊かなお腹を押し潰し屈みながら、雪の上に横たわる私へ名乗り、問いかけるオッサン。

可愛いな、ポックリと突き出たお腹を見つめ……触れてみたい衝動に駆られる二十代前半の乙女が一人。

「あの、とりあえずそのとっても魅力的なお腹に触れても……良いですか？」

聞くは一瞬の恥、聞かぬは一生の悔いでよう！だって、その揺蕩うぼつちやりお腹が、さあ触つてごらん？その瞬間、君を夢の世界へ招待しようつーと私を誘うのだもの！！

「……え？君、大丈夫？」

何か聞き間違えたような、困惑したような表情で私を見つめるオッサンを見て……今更違和感が。

「やっぱり……僕の住む山に人間の、しかも若い娘さんが迷い込むなんておかしいと思つたんだ」

そう言つて、深いため息を吐くオッサン。

……良く見れば、このオッサン髪は青いし服は神話の神様みたいに長い布を巻きつけただけだし、本当に今更だけど此処雪山だし、夢の中で夢でも見てんのかな？

「とりあえず……」じりじり あ人間の君には寒すぎる。凍死してしまつ前に、僕のお家へおいで」

勝手にぶつぶつ独り言を呟いてふよぶよした柔らかそうな頸肉を揺らしていたオッサンは、そのぼちぢやりした身体のどこにそんな筋肉が？と聞きたくなるほど軽々と自然に私を抱き上げ……どこに向かうのかも知らせぬままえつちらほつちらと歩き出した。

「……ふふ、ふふふ」

ふよふよ、ほよほよ、ふるんぶるん……足を進めるたびに揺れる肉付きの良い腕の中。一方の私は、抱き上げられ心地抜群の柔らかな脂肪の感触を心行くまで楽しんでいるのだけど……ふといやつきながらオッサンを見上げれば何故かヤツは憐れんだ眼差しでこちらを暖かく見守っている。……何故だ？

## 婚姻す

「ん？」

ぱちやぱちやしたその暖かな腕の中で眠りについた私が目覚めたのは、またも見知らぬ場所。暗くて良く見えないけど、多分……洞穴とか洞窟とかそんな感じだと思う。

「目が覚めたかい？」

寝転がつたまま横向きになれば、そこにはあのぼっちょり系のオッサンがいた。しかも物凄い近い所で私を覗き込んでいたので……とりあえず抱き着いてみたけど何か？

「…………とうつ」

「うわあつ」

丸いオッサンは私のタックルに耐えられず、あえなく一人で床を転がる羽目に……。

「い、いたたつ。……氷竜の僕に抱き着くなんて、やっぱり君は人間の手には負えなくて捨てられたんだろう？」

「はあ？！」

氷竜つて……オッサンは見た目的に人間だと思うのだけど？

「……君、人間の村娘にしては柄が悪いね」

「放つておいてください」

ふんつと鼻息を荒くしてもその魅力的な腹からは意地でも離れない私の様子を見て、オッサンは一つため息を吐き……

「僕は氷竜だから冷たいだらう？ 抱き着いてると身体に悪いよ？」

本当に心配げに声をかけて来たので、腹に貼りつけたままでいた顔を上げてオッサンを見上げる。

青い髪に同じ色の瞳と眉をハの字に歪めて、たぼたぼした頸肉を三重に押しつぶしてこちらを見下ろすオッサンは……可愛い。

「あのねえ、私は地球つて星の日本つて国の人っても寒い土地出身なの。オッサンが何者でもどうでも良いし、冷え性の対策ぐらい自分で出来るから大丈夫」

「…………ちきゅう? にほん?」

ああ、やっぱりな。聞いたことない単語を耳にしたって顔のオッサンを見て、何となく諦めた。今は、そつ……この暖かなぱっちゃん系の柔らかな腹があるし、顔を埋めてじっとしてると安心して、何となく何とかなるような気がしてくる。

「あ、そつちは気にしないで。とにかく…今言いたいのは寒さには強いですってこと」

やつ言こわった私は、とりあえずじつとオッサンの反応を待つ。

「……僕に抱き着いていても寒くないのかい？」

「ん、むしろ暖かいし」

すると、オッサンは突然私をそのぼっちゃりしたまあるい腹で押しつぶすことに決めたらしく視界が真っ暗になりついでに息が……。

「……むぐぐ」

「なんて幸せな日だらう！！君が村人の手に負えない子で本当に良かつた！！捨てられて万歳だよ！！」

何言つてんだこのぼっちゃり系のオッサンが！！第一に、私は別に捨てられてないし！！捨てられて万歳つてなんだよ！！

「殻から生まれて幾百年！！……あれ？もつ千年ぐらい経ったかな？ううん、まあ良いや。兎に角」

ぱつと手を離されて、これ幸いと私は思い切り息を吸つた。

「君の名前、今日からマジュネッタだから」

とにかく酸素不足の肺に必死で酸素を吸い込んでいた私には、知らないうちに新しい世界で新しい名前が名づけられましたトサ。

「つて、なんで？！」

ぶんつと音が聞こえそうながらい勢いよく顔を上げると、そこには当たり前だけどオッサンの顔が……

「マジュネット、僕にも名前付けて」

その名を呼ばれて深い青の瞳に見つめられると、何故だか知らないけど、不思議と知らない名前が脳裏に浮かんで……気が付けば私は自然とその名を口にしていたらしい

「……ビエネ、ビエネットール」

「うん、じゃあ僕は今日からビエネットールだ。あ、他の生物に名乗るときは氷竜が妻と名乗るんだよ？マジュネットの名前は僕だけが知つていれば良いんだから」

……いや、だから何がどうじていつオッサンの妻になつたんでしょうね？

このオッサンが実は本物のファンタジー系氷竜で年が千年くらいいだつて事実は実のところ全く以て信じがたいけれど、まあ自分自身が地球と言う異世界の星からやつてきたらしい以上認めざる得ない。

「これぞまさに、事実は小説より奇なりつてやつよね」

そして、氷竜はその名の通り氷を操り、尚且つとてもなく寒い土地に住む生き物らしくて、しかもオッサン自体が氷点下の体温しかないと言つとんでもない生物なわけだ。あげく、竜って言つ生き物は元を正せば爬虫類みたいなものだから他の竜たちは皆、比較的暖かい地方を住処としていて、仲間と言える生物が今の今まで存在していなかつたといい歳した引きこもりのオッサンは寒さを物ともしない私を見つけこれ幸いと、指輪の交換ならぬ名前の交換をしたわけだ。

「……ねえ、オッサン。私は別に此処で一人生き残るすべなんて持つてないし、むしろ雪山に置き去りにされたらたどり着くのは凍死だけだから、拾われた命だし結婚しても良いけど」

文句どころか、その柔らかな腹に毎日抱き着く口実が出来て、尚且つ衣食住を賄つてもらえるわけだしむしろ感謝だけど。

「でも、オッサンは良いの？私みたいな普通の人間が嫁に來たところで悪いけど料理へただし、竜つて卵生でしょ？卵なんて産めないし、何にも出来ないけど」

オッサンの柔らかな身体をソファ代わりに背中を預けてその太も

もに腰掛け、後ろに首をひねって問い合わせる。

「マジュネット、折角名を付けたのだし出来ればビュネットルと呼んでくれないかい?」

此処へ来るまでの憐みの眼差しは一体なんだつたんだ? そう問い合わせたくなるくらい今現在私を見つめるオッサンの眼差しはとてもなく甘い。

「……ビュネットル」

ふにふこと可愛いオッサンの両手を掴んで遊びながらしぶしぶとそう呼ぶ私。

「大丈夫、子供は母親が一番産みやすい姿でこの世に出てくれるんだ。それに、僕の主食は氷だし」

……氷食うの? 外にあるやつ?

「そもそも竜の特徴は大きく分けると三つある。一つはとても強いと言つこと。二つはとても愛情深いと言つこと。三つはとても寿命が長いと言つこと。僕等は長命種だからなのか子が出来ずらくてね……何千年生きても、生涯子に恵まれない夫婦もいるくらい。だからこそ、自分の奥さんや旦那さんをとってもとっても大事にして、ありつけの愛をたっぷりとさげて生きるんだよ。子供が出来ればそれこそ夫婦だけじゃない、竜種全体のお祭り騒ぎでお祝いされて、皆が子育てを手伝ってくれるし」

「ふうん」

「それ、僕等つて遙か昔から伴侶を選びにかかる傾向にあるんだ。」

……

「だから、マジュネッタが何もしたくないなじみもしなくて良いやつ？」

「何もしなくて良いよ」

……ぱつちやり系のオッサン、もとい私の夫ビエネットールがそう言つたので本当に何もせずに我が家である洞窟内の藁の上で寝そべり過ごすこと早数日。

「……ねえ、毎食これなの？」

ビエネットールは外にある天然氷百パーセント配合の氷を食べているらしいから良いけど、私の食事はオッサンの持つてくる肉のみ。それも骨付きで新鮮な血の滴る野性味溢れるサバイバル料理で、料理法はただ焼くだけ。

まあ、自分で何もしていない以上文句も言えないかと黙つてはいたけどもう限界。一生この骨付き肉だけを口にして生きるくらいなら少ししゃべり動きますよ。

「え？僕の知り合には「これを出すととっても喜んでくれるんだけど……」

「んだけ肉食系の人間でしょうかね？って言つかこんな山奥に遊びに来るような人間他にもいたのか？！」

「たまには他の物も食べたい。それとその人間の知り合いにも会いたい。って言つか一生ここで生活するの？」

やつぱりどんなファンタジーな山でも麓まで下りれば村とかあるでしょう？

「人間の食べ物かあ……あの子は今どこにいるか分からないし」

……その柔らかな三十顎に拳を当てる考え込んでいたビーハネットー  
ルをドキドキと期待に胸を弾ませて見守る私。

「麓の村は前に一度雪崩を起こして全壊させちやつたから、後数  
百年は顔を出せないしなあ」

……うん、聞かなかつたことにしよう。折角ファンタジーな世界  
で楽に生きると決めたんだし、オッサンが私と会う前に何してよう  
が関係ないよね？！

「じゃあ、色々と聞きたいこともあるし……人間と結婚した同族  
に会いに行こうか？」

おおー！まともやつな相手が見つかつたらしい。良かつた良かつた  
！！

「うんー…それが良いと思つー…それで？相手はどんな竜なわけ？」

寝そべつていた藁のベットから起き上がり、期待に目を輝かせて  
オッサンへと詰め寄ると

「一応人間の姿で彼らの集落に溶け込んで生活しているみたいな  
んだけど、そういえばもう二三十年くらい連絡も取っていないな  
あ……」

……え？

「三十年……それ、本当に大丈夫なんでしょうね？」

三十年って、長すぎでしょ？！相手が人間で三十年も経つてたら生まれて恋愛して結婚して子供産んで子育て真っ只中じゃ……引っ越しとか、してないでしょうね？」

「うん、多分」

「少分つて、怪しそうなんですね？」

はあ、とため息を吐きながらオッサンの大きなお腹に倒れ込む私。期待した分なんか疲れた……。

「でもまあ、あそこは都会だし……会えなくとも色々観光するのも良いんじゃないかなあ？」

「はつー！」

その観光、の言葉を聞いて思い出した。

「私達って、新婚だよね？」

柔らかなお腹に伏せていた顔を上げ、オッサンへ問いかけた。

「うん？ 人間ではどうつか知らないけど、僕等の表現では蜜月と呼ばれているよ」

オッサンは一生懸命顎についた三十肉を押し潰し視線を下げて私を見ようとしているけど、どうにも上手くいかないみたい。微笑ましくてこいつまでも見ていていいけど、それじゃあ話が進まないし！え

えと、人間では新婚で竜では蜜月で……つて

「そうじやなくて、呼び方なんてどっちでも良いけど…とにかく！私たちは結婚したばかりってことが重要なの…！」

つい興奮のあまりオッサンの腹に手を着いて身を乗り出してしまつたけど、今更そんなことどうでも良い…!!

「……結婚したばかりだと、何か問題があるのかい？」

そんな私戸惑つたように見つめるオッサンへ叫んだ…！

「結婚したばかり夫婦は旅行へ行くものなの…！観光じやなくて新婚旅行…！」

ちょっとばかし大きな声で叫び過ぎたか……洞窟内に私の声が反射してやまびこ状態だ。

「……し、しんこんりょ」う…」

「そう…！私のいた場所では、結婚したばかりの夫婦は新婚旅行を経て愛を育むものなの…！」

最終的には拳を握つてオッサンへ新婚旅行がいかに楽しく幸せで初々しい夫婦にとつて大事かを説いていた私は、ふと黙つてその話を聞いていた夫の顔へ視線を落とす。

「「……」」

……またしてもオッサンは甘い視線で私を見つめていて、今の話

しの「パパ活」的な要素が？

「じゃあ、その新婚旅行ついて話の口に出かけよつか」

「え？ 本気で？」

「うん」

そんなに呆氣なく決めちゃつてこいの？…と私は握っていた拳を解き、オッサンの頬肉へと両手を添えてもう一度聞きなおしてみた

「真面目に話すの…お金もなしありなぐせに」

「お金は持つてるよ？ もう何五年も生きてこるし。まあ、さすがにここには置いていないけどね。それに、その新婚旅行へ行くことでマジコネックタともっと仲良くなれるなりとしても嬉しいし、君が夫婦の愛を深めたいと想ってくれてこるなんて……僕は今この世界に生きるどこの竜よりも幸せだよ」

「うん、まあ……なんかちょっと違つたけど、まあ大体は合ってるから良いやね？ 旅行に連れて行ってくれるって言つただし…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7089z/>

---

ばっちょり氷竜

2011年12月31日17時31分発行